慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヘーゲル哲学とコミュニケーション理論 : ハーバーマスのヘーゲル解釈に寄せて
Sub Title	Hegels Philosophie und die Kommunikationstheorie : Zur Habermaschen Interpretation von Hegel
Author	浅見, 昇吾(Asami, Shogo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1996
Jtitle	哲學 No.100 (1996. 3) ,p.87- 100
JaLC DOI	
Abstract	Diese Arbeit versucht, die Habermasche Auslegung von Hegels Philosophie zu prufen. Zuerst werden einige Besonderheiten der Interpretation von Habermas deutlich gemacht, indem die Habermasche Deutung mit der Karl-Heinz Iltings konfrontiert wird. Dabei wird gezeigt, dass Habermas Hegels Philosophie statisch und deterministich auslegt. Dananch wird untersucht, wovon diese deterministische Interpretation herruhrt. Aus dieser Untersuchung ergibt sich, dass Habermas die Denkfigur Hegels seiner eigenen Denkfigur entgegensetzen will, und dass er daher auf einseitige Weise die Denkfigur Hegels kritisiert. Ich unternehme sodann, einige Beziehungen zwischen den zwei Denkfiguren klar zu machen. Zuletzt wird auf eine neue Moglichkeit der Philosophie Hegels aufmerksam gemacht.
Notes	100集記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000100-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヘーゲル哲学とコミュニケーション理論
——ハーバーマスのヘーゲル解釈に寄せて——

浅　見　昇　吾*

Hegels Philosophie und die Kommunikationstheorie
——Zur Habermaschen Interpretation von Hegel——

Shogo Asami

Diese Arbeit versucht, die Habermasche Auslegung von Hegels Philosophie zu prüfen. Zuerst werden einige Besonderheiten der Interpretation von Habermas deutlich gemacht, indem die Habermasche Deutung mit der Karl-Heinz Iltings konfrontiert wird. Dabei wird gezeigt, daß Habermas Hegels Philosophie statisch und deterministich auslegt. Dananch wird untersucht, wovon diese deterministische Interpretation herrührt. Aus dieser Untersuchung ergibt sich, daß Habermas die Denkfigur Hegels seiner eigenen Denkfigur entgegensetzen will, und daß er daher auf einseitige Weise die Denkfigur Hegels kritisiert. Ich unternehme sodann, einige Beziehungen zwischen den zwei Denkfiguren klar zu machen. Zuletzt wird auf eine neue Möglichkeit der Philosophie Hegels aufmerksam gemacht.

* 慶應義塾大学文学部非常勤講師（哲学）

1 序

ヘーゲルの思想は奇妙な歴史を辿ってきている．非常に多くの思想家達がヘーゲルの思想に取り組み，驚く程多様なヘーゲル解釈を展開してきた．にもかかわらず，解釈者達は一様にヘーゲルの立場に不満を表明しているのである．ルドルフ・ハイムからゲオルク・ルカーチを経てディーター・ヘンリッヒに至るヘーゲル文献の幾つかに目を通すだけで，このことは十分に理解できる．例えば，ルドルフ・ハイムは，ヘーゲル哲学は新興プロシアの御用哲学にすぎないと，ヘーゲル哲学の保守性を非難する(1)．ヘーゲル左派やルカーチは，ヘーゲル哲学をある種の革命の哲学として捉えながらも，その立場の不徹底性を非難する(2)．つまり，まったく正反対の解釈が横行するとともに，双方の解釈者達がヘーゲル思想の不十分性を指摘しているのである．このような状況を前にすれば，ヘーゲル哲学はある種の矛盾を抱えているのではないか，と疑問をもつのは当然のことである．

そこで，現代の様々な問題と格闘する哲学者の中から，ヘーゲル哲学の矛盾を独自の観点から指摘しようとする哲学者が現れてきた．それがハーバーマスである．ハーバーマスはヘーゲル的問題(3)と取り組む中で，自らの理論を展開し，新たな理性主義を構築しようとする．反理性主義が台頭する現在，このようなハーバーマスの試みは多くの思想家の興味の的となっている．したがって，ハーバーマスのヘーゲル解釈を吟味することは，ヘーゲル思想の可能性を探ることのみならず，現代思想の一つの問題をクローズ・アップすることにつながるのである．このことを念頭に置いた上で，ハーバーマスのヘーゲル解釈を吟味したい．

2 ハーバーマス解釈の独自性

ハーバーマスのヘーゲル解釈の独自性はカール・ハインツ・イルティン

グのヘーゲル解釈[4]と対比することで明らかになる．というのは，イルティングはハーバーマス以前にヘーゲル哲学の矛盾を指摘しているだけでなく，ハーバーマスとはまったく異なる方向でヘーゲルを解釈しているからである．

イルティングはヘーゲルの思想的発展を説明する際，1819年のカールスバート決議に大きな意味を付与している．イルティングによれば，ヘーゲルは本来リベラルな思想を持っていたが，言論統制や大学の監視などを決めたカールスバート決議後の政治状況が非常に保守的だったために，自分の思想を粉飾しようとしたのである．こうして，リベラルなヘーゲルと反動的なヘーゲルが生まれることになる．この引き裂かれた二人のヘーゲルの混在がヘーゲル哲学の矛盾の原因である，という結論が導かれるのであった．

しかしながら，イルティングのこの解釈には大きな問題点が含まれている．ヘーゲルの「法哲学」の講義録をもとに，講義録と政治的状況の関連を追求したイルティングはヘーゲルの「現実」(Wirklichkeit) という言葉とプロシア国家の現実のつながりに注目している．ところが，「現実」(Wirklichkeit) や「現実的」(wirklich) というのはヘーゲルの体系の中ではあくまで一つの術語（ターミノロジー）であって，目の前に見出される現実ではない．イルティングの主張は多くのヘーゲル解釈者達と同様，術語としての「現実」(Wirklichkeit) と眼前に見出される現実とを混同し，ヘーゲルの術語に十分な注意を払っていないように思われる．ヘーゲルの「現実」(Wirklichkeit) は目の前に見出される現実の一部分のみを指し示している[5]．様々な媒介関係に支えられた事態，「必然的事態」のようなものだけがヘーゲルの「現実」(Wirklichkeit) なのである[6]．ヘーゲルの「現実」(Wirklichkeit) 概念の解釈には議論されるべき事柄が多々あるにせよ，政治的状況との直接的関連の中でのみこの概念を吟味してはならない，ということだけは確かであろう．

したがって，ヘーゲル思想に矛盾があるとすれば，それをヘーゲル哲学から内在的に説明する努力がなされるべきなのである．この点でハーバーマスの解釈は傑出している[7]．ヘーゲルは一つの問題を首尾一貫して考え抜こうとしたことによって，まさに不可避的に矛盾にまみれてしまったと，ハーバーマスが捉えているからである．つまり，ハーバーマスによれば，ヘーゲル体系の矛盾は，ヘーゲルが近代の問題を内在的に展開したことに由来するのである．ここで近代の問題の内在的展開というとき，ハーバーマスは二つのことを考えている．第一の点は，ヘーゲルが正当にも近代の問題を分裂社会の統一の問題として捉えているということに存する．ハーバーマスはマックス・ウェーバー流の近代化理論に従い，文化の諸領域の自律性の増大や，経済的領域と官僚制的国家機能との分離を，要するに社会の分裂化傾向を近代化の大きな特徴と見て取っているのである．第二の点は，ヘーゲルがこの問題の基礎づけと克服に立ち向かうとき，主体性や主観性の思考モデルを使っているということに存する．アトムとしての個人の主観から出発する思考モデルは，周知のように，近代の哲学を特徴づけるものである．それゆえ，主体性や主観性の思考モデルに基づいて近代の問題を克服しようとするなら，それは内在的な克服の試みに他ならない．そして，ヘーゲルのこの内在的な試みは極めて正当なものだと評価されるのである．なぜなら，ハーバーマスによれば，近代社会や近代哲学は，自らの規範を自らの原理のうちから汲み出さなければならないからである．伝統的社会は自らの規範を過去から汲み出していた．伝統に根差し，伝統を拠り所とする規範や基準を投げ棄てることで，近代は成立した．であれば，近代が自らを正当化するとしたら，近代は「いま，現在」の原理に，つまり主体性や主観性の原理に頼らねばならないのである．この問題に取り組んだヘーゲルはまさに近代ないしモデルネの問題に真正面から向かっていったのである．

3　モデルネの哲学としてのヘーゲル哲学

ハーバーマスは以上のようなヘーゲル解釈をヘーゲルの思想的発展から内在的に導こうとしている．それゆえ，ハーバーマスやルカーチの説明に依拠しながら，ヘーゲルの思想的発展を概観することにしよう[8]．このことでハーバーマスの主張するヘーゲルの矛盾が何かを検討したい．

青年ヘーゲルの眼前に繰り広げられていたのは，啓蒙主義運動が封建主義の残滓の破壊とキリスト教正当信仰の解体に取り組んでいるという光景だった．伝統的社会は，「聖なる天蓋」[9]ともいうべき象徴秩序に覆われていたが，啓蒙主義は批判的理性の名のもとに現存するものすべてを吟味にかけ，伝統的秩序を破壊していった．そこで，ヘーゲルは啓蒙主義の批判的理性こそが調和のとれた習俗世界を破壊し，個人と環境世界の摩擦や対立を招いたと考えたのであった．このことは，本来なら啓蒙主義の理性主義的側面を支持するヘーゲルを二重の戦いに導くことになった．啓蒙主義の洗礼を浴びたヘーゲルは，一方で，理性的裏付けがなく，権威のみに基づいたもろもろの制度や慣習を批判し続ける．ヘーゲルがポジティビテートないしポジティビティと名づけたこうした現象は多岐に渡るが，ヘーゲルは一貫して理性的洞察の裏付けのないものを批判する．しかし，他方でヘーゲルは，既に述べたように，独断啓蒙主義，つまり心情を伴わない理性的形式主義に反対する．かくして，ヘーゲルの目指していたものは理性と心情の統一であり，個人と社会的環境世界の融合した状態であった，といえよう．まさしく分裂と統一というモデルネの問題がヘーゲルにおいて主題化されているのである．

この二重闘争の中で，ヘーゲルは当初アテネの古典ポリスの社会を理想的社会状態として描く．最盛期のアテネ社会では私的生活と公的生活とが解け合っていたからである．とはいえ，ヘーゲルは古典ポリス社会を模範にする考え方をやがて捨てることになる．この理論的転換をもたらしたも

のはポリティカル・エコノミーであった．ヘーゲルはポリティカル・エコノミーに習熟した結果，私的生活の領域と公的生活の領域を区別するようになる．私人の領域たる市民社会と公人の領域たる国家を切り離し，双方を自立した領域として把握するようになるのである．市民社会はいかなる伝統的社会とも異なる社会であり，国家との一体性から解き放たれた社会に他ならないのである．こうして，市民社会以前の社会に戻ることなど不可能なことが自覚されるに至る．ハーバーマスによれば，この知見を得ることで，ヘーゲルはアテネに理想像を求めることを断念するのみならず，総じて過去に理想像を求めることを断念するようになったのだった．それゆえヘーゲルは，近代の原理，要するに主体性の原理のうちに，個人と全体の和解の原理を求めざるを得なくなったのである．

ここにおいて，どのような場面でこの主体性の原理が用いられるか，という問題が生じる．社会の領域，すなわち市民社会は和解の場にはなりえない．そこでは個々人が対立し合い，耐え難い程の富の不平等が横行しているからである(10)．となれば，国家が和解の場として残されることになろう．ヘーゲルはポリティカル・エコノミーに精通することで，国家は市民社会とは別個の独自の領域である，と捉えていたからである．かくして，ヘーゲルは国家に主体性の原理を適用する．主体性の原理とは，ヘーゲルやハーバーマスによれば，「自らを自らに関係づける」運動であった．だから個々人が逸脱行為をしようとしても，国家は自らの秩序にそれを組み込むことになるのである．国家は一つの主体かつ実体であって，いわばその偶有性として現れる個々人を自らの秩序に関係づけ，組み込むのである(11)．ここからハーバーマスは，個人は国家のシステム，絶対者のシステム，国家の諸制度にすっかり組み込まれる，という結論を導いている．和解は主体性の思考モデルによって強制的に成就された，と結論づけるのであった．

ハーバーマスによれば，このことはすべてある一点を指し示している．

すなわちモデルネの哲学としてみるなら，ヘーゲルの主体性の哲学はモデルネの重要な一契機を逸している，というのである．モデルネはポジティビィティに対する批判に取り組み，そのためにこそ批判の基準を主体性のうちに見出そうとしたのにもかかわらず，「いま，現在」に対する批判のポイントを喪失してしまったのだった．というのも，ハーバーマスの言葉を借りていえば，国家に具現化された「絶対者はすでに和解を成し遂げており，本質的に重要な事柄はすでに決せられている」(12) からである．ハーバーマスはこの点に，ヘーゲルの最終的限界を見て取っている．ポジティビィティの批判としてのモデルネの哲学，「いま，現在」の批判の基準を求めるはずの哲学が批判のポイントを逸してしまっていることこそ，ヘーゲルの哲学の限界であり，矛盾なのである．

4　ハーバーマス解釈の背景

ハーバーマスが描いているのは，このように極めてスタティックで決定論的なヘーゲル哲学像である．しかしながら国家が市民社会の矛盾を正すということ自体からは，決定論的結論は直接には出てこない．例えば，現代国家は実際に市民社会の矛盾の矯正に乗り出しているが，ハーバーマスのいうヘーゲル的国家像とは異なる国家になっている．現代国家の多くは自由主義的教条を掲げているのである．また，個人がいわば偶有性として出現するといっても，このことは個人をアトムとして捉える考え方の批判として弱く解釈することもできないことではない．さらには，ヘーゲルは「エンチクロペディー」で幾度となく，偶然性の入る余地を認めている(13)．だから，ヘーゲルの体系は完全に決定論的であり，個人に自由な決断と行動をまったく認めていないという解釈には，疑問の余地がないわけではないのである．たとえ，ハーバーマスなどが主張する相互主観性という視点の不可欠性を認めてさえも，ヘーゲルの体系自体の中に相互主観性を組み込むことが出来るかも知れないのである．実際，ヴィットリオ・

ヘスレはこのようなことを試みている[14]．このような様々な解釈が可能である以上，ハーバーマスのヘーゲル解釈をそのまま受け入れるのではなく，ハーバーマス解釈の底に潜む独特の意図について考察することも必要であろう．つまりハーバーマスがヘーゲルの体系を否定的に，決定論的に記述したのには，それなりの理由があるのではないか，と問うこともできるのである．

この疑問を解明する手掛かりは，ハーバーマスの描くヘーゲル以後の哲学史にある．これまで述べてきたように，ヘーゲルの思想は主体性の思考モデルに基づいていた．ところがハーバーマスによれば，この思考モデルの欠点はヘーゲルの体系の中に如実に現れているとはいえ，ヘーゲル以後の哲学者までもがこの思考モデルに囚われているのである[15]．ハーバーマスはこの思考モデルに対置させるものとして，まったく新しいパラダイムである自らのモデル，つまりコミュニケーション的行為のモデルを提示する[16]．したがって，乗り越えられるべきパラダイムたる主体性の思考モデルに対して，否定的な評価を下さざるを得ないのである．

主体性の思考モデルへのこの否定的評価をさらに厳しいものにするのが，フランクフルト学派ないし「批判理論」の重鎮ホルクハイマーとアドルノの影響である．ハーバーマスの先駆者たる二人が「啓蒙の弁証法」[17]で描き出した道具的理性の破壊的運命とは，主体性の思考モデルの運命に他ならないからである．主体性のモデルは主体と客体の対立に基礎を置いている．ということは，主体と客体が分離され，主体は客体もしくは対象に働きかけ，対象を加工し利用する，ということになる．何かを成し遂げることに定位したこのような行為こそ，道具的（インストゥルメンタルな）行為あるいは戦略的（ストラティジックな）行為に他ならない．そしてホルクハイマーとアドルノによれば，この道具的行為や道具的理性は遙か古代から人類の歴史に登場し，以来ずっと人類を導いてきている．なぜなら，神話の時代から啓蒙主義の時代を経てナチズムの狂気に至る人類の

歩みを導いてきたものは，自然を支配しようとする人間の行動だったからである．そして，自然支配は対象として現れるものの支配や人間自らの内面の抑圧等々へと拡大されていった，とされる．それゆえ，ホルクハイマーやアドルノにあっては，自然支配，労働のモデル，主体と客体の対立のモデル，道具的行為のモデルと呼ばれるものが人間の行動を説明する万能の原理になっている．しかも，道具的理性は最後に人間支配に行き着き，完全にマニピュレートされた社会を産み出した，とされているのである．してみれば，道具的理性や道具的行為は，結局のところ自由な行動の原理と矛盾するものだということになる．道具的行為は抑圧，不自由，支配，マニピュレーションの原理，諸悪の根源になる．ハーバーマスは道具的行為に関するこの特徴づけを受け継いだように思われる．なるほど，ハーバーマスは「批判理論の批判」という形でホルクハイマーとアドルノを批判している(18)．ホルクハイマーとアドルノは道具的理性の不十分さとこれに代わる新たなモデルを予感していたが，それを発見できなかったし，表現できなかった，というのである．しかし，ハーバーマスがホルクハイマー達の道具的理性や道具的行為の特徴づけを受け継いだことには変わりはないのではないだろうか．換言すれば，このような継承があればこそ，ハーバーマスは自らの新たなパラダイムたるコミュニケーション的行為に，つまり純粋な相互理解に定位した行為にありとあらゆる長所を帰属させ，道具的行為に対置させることが出来たと思われるのである．

こうして，自由の原理に対立する原理，すなわち道具的行為のモデルや主体性のモデルが否定的に，決定論的に描かれることになる．そして主体性のモデルを体現するヘーゲル体系がかなり決定論的に捉えられざるを得なくなるのである．

5　戦略的行為とコミュニケーション的行為

では，道具的行為もしくは戦略的行為とコミュニケーション的行為とは

本当に相互に対立し，いわば排除し合うものなのだろうか．あるいは，諸悪の根元は道具的行為や戦略的行為にあるのだろうか．必ずしもそうではないようである．戦略的行為とコミュニケーション的行為が一体化している領域があると考えられる．例えば，教育の場といった日常生活のレベルにおいても，戦略的行為とコミュニケーション的行為の双方の契機が入り込んでいる．教える側がある特定の戦略的意図をもって生徒に接することもあるのである．どのような意図に基づいてカリキュラムを組んだのか，生徒をどこに導こうとしているのか，一つの問題の背後にどのような他の問題が隠されているのか等々を，教師は常に生徒に明かすわけではない．それと気付かぬうちに，生徒を新たな領域に導くことのうちに，教師の手腕が懸かっている場合もあるのである．また，教育の場における教師の戦略的意図は生徒への配慮に由来するものであって，利己的な動機に発しているものではない．戦略的行為は自分の利益になることを成し遂げる行為と同一視され，非難されがちだが，戦略的行為を利己的行為と無造作に同一視するのは許されないことになる．戦略的行為を一方的に非難するのは適当ではないのである．

道具的行為や戦略的行為とコミュニケーション的行為の関係については，まったく別の角度からもハーバーマス的解釈に疑問を投げかけることができる．例えば，コミュニケーション的理論の枠組みでは，ピエール・ブルデューが提出した問題群を把握するのは難しいと思われる．ブルデューは非常に綿密な経験的リサーチを通じて，議論を展開している．したがって，ブルデューの理論全体に同意しなくとも，経験的分析によって示された問題自体は容易には否定できない．けれども，ハーバーマス流のコミュニケーション理論では，このような問題群を取り上げるのは難しいように思われるのである．

ブルデューが指摘しているのは，現代社会を含めたすべての社会で常に階層間に激しい闘争が繰り広げられているという事実と，様々の階層間の

闘争が主に象徴という手段を通じて行われているという事実である[19]．象徴的手段は，言語，物財の交換，服装，食事内容，文化的趣味など多岐に渡る．というより，生活のほぼ全域に渡る，といえよう．ブルデューはこのような象徴的手段による階層間闘争が，一つの階層の成員達に行動や思考のための特定の図式を与える，という．それどころか，各成員は各階層に特有の思考や行動の図式を無意識のうちに植え付けられるのだ，と主張するのである．このような考え方に立った場合に，コミュニケーションのあり方はどのようなものになるだろうか．各階層は社会的階層の階段の上昇を求めて，他の階層と争っているのだから，各階層内部の象徴的活動は階層の上昇というモチーフに貫かれていることになる．それだから，異なる階層の成員間の交流，コミュニケーションの背後には戦略的な意図が潜んでいることになろう．また，各階層内の成員のコミュニケーションにしたところで，戦略的闘争と不可分の思考図式や行動図式に導かれているのだから，戦略的行為とコミュニケーション的行為が混ざり合っていることになろう．上述の教育の場とはまったく異なった形ではあるが，やはり戦略的行為とコミュニケーション的行為は解け合い，一体化している．すなわち，戦略的行為とコミュニケーション的行為を対立させるだけでは不十分なのである．

6 展　　望

ハーバーマスの議論の難点は，上述のように，戦略的行為とコミュニケーション的行為の密接な関係を明確にできていないところに存する．ハーバーマスはこの難点のゆえに，ヘーゲル解釈のみならず，彼自身の理論の展開にも問題を残すことになったのである．しかし，逆にいえば，二つのタイプの行為の関連を追求すれば，多くの可能性を開くことになる．一方でヘーゲル解釈の新たな可能性を開くし，他方で現代思想の新たな発展の可能性を開くことになるのである．実際，ヘーゲルにおける両タイプ

の行為の関連はあまり追求されていない．ヘーゲルは「自己意識」の分析で相互承認理論という一種のコミュニケーション理論を展開しているにもかかわらず[20]，ヘーゲル哲学は往々全体主義的哲学，権力の哲学，つまり戦略的行為の哲学として解釈されるのである．戦略的行為とコミュニケーション的行為の関連という視点を追求すれば，ヘーゲル解釈の新たな可能性やヘーゲル哲学の新たな可能性を探ることになるのは間違いない．また，ハーバーマス的なコミュニケーション理論における戦略的行為の位置が明確にされるなら，現代哲学の問題の一つを解明することにつながる．ハーバーマスとルーマンの論争に見られるように[21]，システム理論とコミュニケーション理論の関係，つまり権力とコミュニケーションの関係は現代哲学の大きなテーマだが，権力とは戦略的行為の最たるものに他ならないからである．戦略的行為とコミュニケーション的行為の関連は現代思想の大問題の一つをなしているといっても過言ではない．要するに，戦略的行為とコミュニケーション的行為の関係の明確化はいまなお大きな課題として我々に残されているのである．

註

（1） イルティングは歴史的事情を踏まえつつ，ハイムの解釈に詳しい検討を加えている．ヘーゲル法哲学資料集へのイルティングの長文の解説を見よ．Karl-Heinz Ilting, " 'Die Rechtsphilosophie' von 1820 und Hegels Vorlesung über Rechtsphilosophie", in *G. W. F. Hegel, Vorlesungen über Rechtsphilosophie 1818–1831*, Bd. 1, (Ed.) K-H. Ilting, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1973.

（2） 例えばエンゲルスはヘーゲルの「理性的なものは現実的であり，現実的なものは理性的である」という言葉の革命的側面を描こうとするが，やはりヘーゲルを批判する．Friedlich Engels, "Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie", in *Karl Marx Friedrich Engels Werke* Bd. 21, Berlin, 1962, Kap. 1. ルカーチに関しては，ヘーゲル解釈上の古典的著作を参照せよ．Georg Lukács, *Der junge Hegel: über die Beziehungen von Dialektik und Ökonomie*, 2 Bde., Frankfurt/M,

1973.

(3) 例えば，近代（モデルネ）の基礎づけの問題である．Vgl. Jürgen Habermas, *Der philosophische Diskurs der Moderne, Frankfurt*/M, 1988, Kap. 1, 2

(4) イルティングの前掲の論文以外に次のものを参照せよ．Karl-Heinz Ilting, "Der exoterische Hegel und der esoterische Hegel (1824–1831)" in *G.W.F. Hegel, Vorlesungen über Rechtsphilosophie 1818–1831*, Bd. 4, (Ed.) K-H. Ilting, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1974.

(5) ヘーゲルの術語には，「現実」以外に，「現象」，「定在」，「現存在」等々がある．これらの術語の正確な関係づけが必要なのである．「現象」，つまり眼前に見出されるものがそのまま「現実」なのではない．「現実」は「現象」より高いレベルに位置している．すなわち，より複雑な媒介過程を経ているのである．

(6) 「本当の現実とは必然的事態である．」G.W.F. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, Suhrkamp-Werkausgabe Bd. 7, S.429.

(7) ハーバーマスのヘーゲル解釈に関しては，Habermas (1988), op. cit. Kap. 1, 2 見よ．

(8) Habermas (1988), op. cit. Kap. 2, Lukács (1973), op. cit.

(9) Peter L. Berger, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, Garden city, N.Y., 1967.

(10) Vgl. insbesondere Hegel, Werke Bd. 7, op. cit., §185, 195, 200.

(11) 国家が実体であり主体である，というこの特徴づけに関しては，次の箇所を参照せよ．Hegel, Werke Bd. 7, op. cit., §257–260, Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse* III, Werke Bd. 10, §537, Habermas (1988), op. cit., S53

(12) Habermas (1988), op. cit., S55f.

(13) 「偶然性は総じて理念の一形式である．この限り，偶然性には，対象的世界においてもやはり相応の位置と権利が授けられなければならない．」Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse* I, Werke Bd. 8, §145, S. 286, Vgl. auch ibid, §143–147.

(14) Vittorio Hösle, *Hegels System. Der Idealismus der Subjektivität und das Problem der Intersubjektivität*, 2 Bde., Hamburg, 1987

(15) Habermas (1988), op. cit.

(16) Ibid, Kap. 11, 12.

(17) Max Horkheimer, Theodor W. Adorno, *Dialektik der Aufklärung: Philoso-*

phische Fragmente, Frankfurt/M, 1988.

(18) Jürgen Habermas, *Theorie des kommunikativen Handels* 2 Bde. 1988, Kap. "Die Kritik der instrumentellen Vernunft" (Bd. 1, S. 489ff.)

(19) Pierre Bourdieu, *Distinction. A Social Critique of the Judgement of Taste,* (transl. Richard Nice), Cambridge (Massachussetts), 1984, Pierre Bourdieu, *Sozialer Sinn. Kritik der theoretischen Vernunft*, (Übers. Gunter Seib), Frankfurt/M, 1993.

(20) よく知られているように,『精神現象学』の「自己意識」章の主要なテーゼは，相手を「自己意識」として承認することでのみ，自らも「自己意識」たりうる，というものである．相互承認の中でのみ，つまり一種のコミュニケーションの中でのみ，個々人の自由と自律性が可能になるのである．

(21) Jürgen Habermas, Niklas Luhmann, *Theorie der Gesellschaft*, Frankfurt/M, 1971